



第 21 回

「^きおく^この固執^{しつ}」

サルヴァドール・ダリ

キャンヴァス、油彩 24.1×33cm 1931年
ニューヨーク近代美術館蔵（アメリカ）

© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2022 G2919

※中学校教科書「美術2・3」P.17に掲載

「時間」への疑義

サルヴァドール・ダリの本作はカマンベールチーズのイメージや性的な不安、フロイトからの影響など多くの分析が既になされているが、本稿では時計のモチーフから時間知覚についての思索の反映という側面を考察したい。

古典をさかのぼるまでもなく、時間の進行についてはしばしば芸術的、文学的、哲学的な興味の対象とされてきた。

時間は、五感で知覚することができない。機能的磁気共鳴画像法(fMRI)が広く使われ始めてから約20年が経過した現在、脳の局所的な活動についてはかなりの部分が解明されてきていると言ってよい。しかしながら、時間感覚を司る脳機能領域については、局所的な機構が発見されていない。

つまり、時間知覚は、局所的な活動ではなく、脳全体の機能が統合されて生じる感覚である。異論も提示されているが、概ね従来の物理学では、時間は一定の速度で線形に進むことが多くの場合のコンセンサスであった。

一方、脳における局所的な活動がネットワーク的に連携して機能することで生成されるのが時間知覚であ

るとすると、時間が一定の速度で進むことを前提とするのは、むしろ人間としての本来的なあり方を歪めるものになりかねない。換言すれば、一般的に広く流通している時計機構が示す時刻は、時間が線形に一定の速度で進むことを前提としており、日常生活もこれに依拠して構築せざるを得ないが、心理学的、生理学的な影響を鋭敏に反映して、人間が知覚する時間の速度自体は常に変化し続けている。

時間知覚が脳における生命維持活動と密接に関連しており、さまざまな認知活動の基礎としても大きな働きをもっていることを考慮すると、近年とみに話題になることの多い睡眠障害(ある調査によれば睡眠に問題を抱える人は約50%に上るという)は、我々本来の時間を強制的に変容させられていることによって惹起されているともいえる。

時間知覚は、精神疾患に見られる認知異常との関連も示唆される。問題提起を芸術の機能と評価するならば、本作は極めて重要かつ興味深いテーマを提供している。また、先端的な物理学が提示する時間の存在への異論、同時性のその存在自体への疑義として、世界の本質に対する私たちの興味を刺激してくる作品でもある。

中野信子
なかの・のぶこ

1975年東京都生まれ。
脳科学者、東日本国際大学教授。
東京大学工学部卒業、同大学院医学系研究科
脳神経医学専攻博士課程修了。
2008年から2010年まで、フランス国立研究所
ニューロスピン(高磁場MRI研究センター)に勤務。
『サイコパス』(文藝春秋)、『脳内麻薬』(幻冬舎)
など著書多数。脳や心理学をテーマに
研究や執筆活動を精力的に行っている。